

アンサンブル・リベラ・バロック コンサート 2016

# ドイツ・バロックの巨匠たち

～バッハ、ヘンデル、テレマンの器楽曲～



チェンバロ

雪田 理菜子(賛助出演)

Ensemble Libera Barocco

新林 俊哉 バロック・フルート リコーダー

吉野 聖子 バロック・ヴァイオリン

若松 幸絵 バロック・ヴァイオリン

吉野 巖 バロック・チェロ

2016 7/3(日)

13:30 開場 14:00 開演

札幌市資料館 2階研修室

■主催：アンサンブル・リベラ・バロック

■後援：札幌市、札幌市教育委員会、アルス室内合奏団、モンテクレールアンサンブル

## ～ PROGRAM ～

### ◆ Georg Philipp Telemann (1681-1767) ドイツ

G. Ph. テレマン : 四声のコンチェルト(または四声のソナタ) ト長調 TWV43:G6

1. Allegro (Vivace) 12/8 2. Grave 3/4 3. Allegro 4/4

Rec 新林俊哉/Vn (Ob) 若松幸絵/Vn 吉野聖子/Vc 吉野巖/cemb 雪田理菜子

テレマンはバッハやヘンデルに比べると知名度は若干低いですが、当時はバッハを凌ぐ人気と名声を博しておりました。多作家でもあり、現存する曲は3600以上に及び今でも新発見が続いています。またバッハやヘンデルが収入の多くを教会や宮廷での音楽活動から得ていたのに対し、テレマンは生前から楽譜の出版で多くの収入を得ていた先進的な作曲家でした。テレマンは自身でもフルートやリコーダーを達者に演奏しており、特にリコーダーを含むトリオソナタ、四重奏などは他の作曲家には、ほとんど見られないものです。一曲目にお聴き頂くこの曲はいくつかの手稿譜が残されており、コンチェルトと書かれたものとソナタと書かれたものと両方が存在します。第一楽章はヴァイオリン協奏曲、第2、第3楽章は3旋律のソナタになっています。(新林俊哉)

### ◆ Georg Philipp Telemann (1681-1767) ドイツ

G. Ph. テレマン : 忠実なる音楽の師より「ガリバー組曲」TWV40:108

Vn1 吉野聖子/Vn2 若松幸絵

J. スウィフトにより出版された「ガリヴァー旅行記」が、当時のヨーロッパ中に瞬く間に広まるなか、テレマンがこの物語に着想を得て、自ら出版する定期刊行誌「忠実なる音楽の師」にこの曲を収めたのが1728年頃。原作は、奇想天外かつ社会風刺的なストーリーを合わせもちますが、テレマンはそれぞれの場面を、明るく奇抜に描きました。第1曲「イントラダ」は、これから航海で起こることへの期待感を表しているかのような、躍動感あふれる曲です。第2曲「リリパット人のシャコンヌ」は、64分音符を用い(3/32拍子)、2拍目が重めの三拍子の中で小人の国のリリパット人を描き、その一方、第3曲「プロブディンナグの巨人のジーク」では、24/1という拍子で、巨人を軽快な舞曲の中で描いています。第4曲「ラピュータ島民たちの空想と、目を覚まさせる下僕たち」では、思索に没頭するラピュータ人たちを、突っついたり刺激して何とか会話しようとする下僕たちの様子、第5曲「礼儀正しいフウイヌム人のルール(第1ヴァイオリン)、野人ヤフーの野蛮な踊り(第2ヴァイオリン)」では、別々の旋律を奏で、会話にならないまま終わります。そんな締め括りでも、全曲を通じて、とても生き生きとした描写がなされており、陰るところが見当たりません。研究熱心で他国由来の舞曲を取り入れたり、新作を発表し続けていたさなかにあったこと、そして散りばめられたユーモアのセンスなど、テレマンが最先端で人気を博していたということも頷けます。様々な楽器を演奏することができたテレマンが、この曲をヴァイオリン二本で描いてくれたことを嬉しく思いつつ、演奏します。(若松幸絵)



### ◆ Georg Friedrich Handel (1685-1759) ドイツ

G. F. ヘンデル : トリオソナタ短調 Op.2-1 HWV386b

1. Andante 4/4 2. Allegro ma non troppo 4/4 3. Largo 3/2 4. Allegro 3/4

Ft 新林俊哉/Vn 吉野聖子/Vc 吉野巖/cemb 雪田理菜子

ヘンデルは、バッハと同じ1685年にドイツに生まれましたが、21歳でイタリアに、27歳でイギリスに渡り、そのまま生涯を過ごします。ヘンデルの特徴はオペラやオラトリオといった劇音楽に才能を発揮した事が挙げられます。器楽曲ではハープシコード(チェンバロ)やヴァイオリンの曲が多い一方、フルートの作品は20曲にも満たなく、膨大な数のフルート作品を残したテレマンとは対照的です。フルートを含むトリオソナタはわずか3曲で、この曲は1732年に出版された「6つのトリオ・ソナタ集」作品2の第1番です。同じ曲でおそらくリコーダー用に書かれたと思われるハ短調の曲も残っており、こちらが原曲という説が有力です。冒頭から印象的な旋律で始まり、第3楽章ではヴァイオリンの重音による和音の上にフルートの美しい旋律が流れてゆきます。(新林俊哉)

～ Pause ～

◆ Johann Sebastian Bach (1685-1750) ドイツ

J. S. バッハ : パルティータ第2番 ハ短調 BWV826

1. シンフォニア Sinfonia 4/4
2. アルマンド Allemande 2/2
3. クーラント Courante 3/2
4. サラバンド Sarabande 3/4
5. ロンド Rondo 3/8
6. カプリッチョ Capriccio 2/4

cemb 雪田理菜子

「6つのパルティータ」はバッハの鍵盤組曲の中で最も独創的で自由度が高く、それまであまり売れていなかった当時、楽界に大センセーションを巻き起こしました。本来の舞曲の配置やスタイルが崩壊して、古典派ソナタ形式へ発展していく過程がここにみられます。第2番の最大の特徴である冒頭のシンフォニアは、オペラの序曲を意味し、フランスオペラとイタリアオペラ、両方の性格を持っています。(雪田理菜子)

使用楽器: 北大ポプラチェンバロ (横田誠三作2006)

北海道教育大学の故・市川信一郎教授の発案・プロデュースにより、2004年の台風18号で被害を受けた北大ポプラ並木の倒木で製作されました。ポプラは軽さと強さのバランスの良さから昔ヨーロッパで楽器材に重用された木材です。脚・譜面台・椅子は同じく台風で倒れた北大構内のハルニレ(英語名エルム)から製作されたものです。

◆ Johann Sebastian Bach (1685-1750) ドイツ

J. S. バッハ : トリオソナタ ト長調 BWV1039

1. Adagio 12/8
2. Allegro ma non prest 3/4
3. Adagio 4/4
4. Prest 2/2

Ft 新林俊哉/Vn 吉野聖子/Vc 吉野巖/cemb 雪田理菜子

ケーテン時代の1720年頃に作曲されたとされるこの曲は、本来は、2本のフルートと通奏低音(チェロとチェンバロ)という編成ですが、今日は、フルート(トラヴェルソ)とヴァイオリン、そして通奏低音で演奏します。そもそもトリオ・ソナタは、2つの対等な旋律パートと通奏低音という編成なので、旋律パートを何の楽器で演奏してもそれほど違和感はありません。なお、バッハは後年、この曲をヴィオラ・ダ・ガンバ・ソナタ(BWV 1027)に編成しています(第1フルートをチェンバロ右手、第2フルートをガンバソロ)。この曲は、緩・急・緩・急の4楽章で構成されています。テンポの遅い第1楽章と第3楽章は非常に美しく、第2楽章と第4楽章は軽快で躍動感あふれる名曲です。(吉野巖)

◆ Georg Philipp Telemann (1681-1767) ドイツ

G. Ph. テレマン : 四声のコンチェルト(または四声のソナタ) イ短調 TWV43:a3

1. Adagio 3/4
2. Allegro 4/4
3. Adagio 4/4
4. Vivace 3/4

Rec 新林俊哉/Vn (Ob) 若松幸絵/Vn 吉野聖子/Vc 吉野巖/cemb 雪田理菜子

今日演奏するコンチェルトは、メンデルスゾーンやドヴォルザークが書いた独奏楽器と管弦楽の伴奏のような大きな編成とは異なり、リコーダー、オーボエ(今日はヴァイオリン)、ヴァイオリンの三声と通奏低音という小さな編成で、トリオソナタに近いものです。日本語で協奏曲というように、それぞれの楽器が旋律を奏でながら調和します。特に4楽章では間に総奏を挟みながら、各声部が20~40小節のソロを披露します。段々と盛り上がっていく様はさながらジャズのセッションを思い起こさせます。(吉野聖子)

Der getreue  
Music-Meister,

G. Ph. テレマン「忠実なる音楽の師」表題  
"Der getreue Music-Meister"

# PROFILE

## 雪田 理菜子 Cembalo

北海道教育大学岩見沢校を総代で卒業(芸術課程芸術文化コース音楽学専攻)。同大学より学生表彰を受ける。札幌オペラスタジオ、他オペラ団体にてコレペティートルとして活動。古楽オペラ現場での研修他、さっぽろオペラ祭公演「コジ・ファン・トゥッテ」「秘密の結婚」などでチェンバロを演奏。主に声楽・管弦楽器の共演ピアニストとしてコンサートに多数出演。13年夏イタリアフィレンツェにて研修。チェンバロ・通奏低音を森洋子氏、音楽学・チェンバロの調律を故・市川信一郎氏に師事。



## 新林 俊哉 Baroque Flute / Recorder

北海道大学電子工学科卒業。バロックフルートを中村忠氏、高橋理恵子氏に師事、リコーダーを江崎浩司、岩田泰氏に、フルートを熊本利絵氏に師事。各地の音楽祭、セミナーにてバルトルド・クイケン、有田正広、花岡和生各氏のレッスンを受ける。モンテクレールアンサンブル札幌、古楽アンサンブル・リベラ・バロックを主宰、バロック室内楽を中心にカンタータ、コンチェルトなど多数の演奏活動を行っている。



## 吉野 巖 Baroque Cello

北海道大学文学部卒業。チェロを元札幌交響楽団の小島盛史氏に師事。1995年アルス室内合奏団結成以来、代表をつとめる。北海道教育大学札幌校准教授(専門は教育心理学・音楽心理学)。



## 吉野 聖子 Baroque Violin

藤女子大学文学部国文学科卒業。中学・高校生のときに札幌音楽院バロックグループにてコレルリ、ヘンデル等の合奏曲に取り組む。2000年札幌古楽の夏音楽祭に参加。以来、寺神戸亮氏、若松夏美氏のレッスンを受講するなどバロック・ヴァイオリンも研鑽中。アルス室内合奏団所属。



## 若松 幸絵 Baroque Violin

小樽商科大学商学部卒業。日本弦楽指導者協会のミュージックキャンプ、札幌西高管弦楽団、ジュネス札幌室内合奏団に参加。2011年よりバロックヴァイオリンを渡邊慶子氏に師事。近年はウェストサイドストーリー、メサイアの演奏会などに参加し研鑽を続ける。会社員。



ご来場ありがとうございました。